



Title	「低温センターだより」編集委員会の思い出：長谷田先生に寄す
Author(s)	川村，光
Citation	大阪大学低温センター 50周年記念誌. 2025, p. 38-39
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/102108">https://hdl.handle.net/11094/102108</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 「低温センターだより」編集委員会の思い出－長谷田先生に寄す

神戸大学分子フォトサイエンス研究センター 川村 光  
低温センターだより編集委員

大阪大学低温センターが発足して50年の節目を迎えられたこと、誠におめでとうございます。歴代のセンター長・副センター長を始めとする関係の諸先生方や技術職員・事務職員の皆様方の奮闘と御努力の積み重ねがあってこそ、この度の50周年かと思えます。また、その記念すべき記念誌に拙文を寄せる機会を頂戴出来ましたこと、大変光栄に存じます。

小生、1982年から1993年にかけて大阪大学教養部物理に助手・助教授として奉職する機会を得ましたが、その間のかなりの期間、ヘリウムを使用することなど全く思いもよらぬ理論屋でありながら、「低温センターだより」の編集委員を務めさせて頂きました。実は、全くと言って良いほど実質的には皆様のお役に立てなかったのですが、この時期に「低温センターだより」の編集委員を務めさせて頂いたことは、小生自身にとっては、誠に得難い貴重な経験となりました。以下では、その辺りの思い出話も含め、一文を草させて頂きたいと存じます。

学位取得後、何とか阪大の教養部に助手として拾って頂いた若造理論屋の小生に、「阪大には低温センターという所があり、そこで定期的に「低温センターだより」という阪大オリジナルの刊行物を発行しているから、その編集委員会に編集委員として加わってみないか？」と誘って下さったのは、「低温センターだより」の初代編集長であった故・長谷田泰一郎先生（当時：基礎工学部教授）でした。先生は、言わずと知れた低温物理学の大家でいらっしゃいましたが、当時我が国で注目されていた、3角格子磁性体などの“フラストレーション”問題にもいたく興味を持たれ、当時無我夢中でフラストレ

ート磁性体の理論研究を行っていた若造理論屋の小生にも目をかけて下さったのかと思えます。「先生、そんなこと言っただけで、私は理論屋だし、そもそもヘリウムのことなんか何にも知りませんよ。」と言って尻ごみする小生に、「そんなことはどうでもよいから、まあ一緒にやりましょう」といった調子で丸め込まれ、何が何だか判らないままに、当時は実験屋さんばかりだった編集委員会の末席に連なることになりました。

長谷田先生の方針で、編集委員会のメンバーは、教授は編集委員長の長谷田先生お一人だけで、他は全員、助教授・助手の方々だったのですが、これがなかなかの猛者揃いで、長谷田先生が心底楽しそうに進めていかれる毎回の編集委員会のやり取り、議論は大変刺激的で、何やら梁山泊の趣きまでありました。当時の阪大には、長谷田先生（基礎工学部）始め、例えば伊達宗行先生（理学部）、大塚頼三先生（教養部）などの、低温センターを支えてこられた大先生方がまだ現役の教授でおられました。「低温センターだより」編集委員会の方は、それぞれの研究室の助教授の先生方、即ち松浦基浩先生、本河光博先生、大山忠司先生らが中心になって、長谷田先生と半分掛け合い漫才のようになりながら、切り回されていました。同席させて頂いた、さらに年下の若造助手から見ても、それは、なかなかの見ものでした。何と言っても、長谷田先生の独特のお人柄とあくなき好奇心が推進力、求心力になっていたんだと思います。当時の我が国は、バブルが弾ける前の、戦後日本の輝かしい青春期の最後のフェーズにあり、今から思うと、その時代を映していた部分もあったのかもしれない。

ところで、長谷田先生は、色々な名言を吐かれることでも有名で、「長谷田語録」として知られていました。私見では、最高傑作は何と言っても、“Small and Individual” だと思います。この言葉は、小生の研究者キャリア全体を通して、我がマインドに深く刻まれています。

「低温センターだより」編集委員としては何のお役にも立てなかったのですが(これは別に謙遜して申し上げてるわけではなく、実際に)、長谷田先生と、先生の退職前の数年間を同じ豊中キャンパスで、低温センターだより編集委員会の場にも同席させて頂きつつ、多くの立派な諸先輩に囲まれながら共に過ごさせて頂く機会を得たことは、何物にも代えがたい貴重な経験でした。

ヘリウム価格の高騰、基礎科学を取り巻く環境の劣化など、昨今の低温センターを取り巻く

状況は決して容易なものではないと思いますが、一方では、量子計算・量子コンピューター分野では、ごく当たり前に mK 温度の必要性が語られるなど、一昔前には考えられもしなかった極低温の用途も広がりつつあるように感じます。低温センターがそのような時代のうねりの中にあって、次の来る50年を、1つには時代の先兵として、もう1つには心ある研究者の時代を超える基準点として、その役割を果たされることを願ってやみません。

## 阪大オリジナルの源流—10年ひとむかし

長谷田 泰一郎

低温センターだより創刊号, 3 (1973)の表紙.



低温センターだより創刊号(1973 年 1 月号)表紙.

目 次	
阪大における低温研究の回顧	永 宮 健 夫 ---- 1
研究ノート	
本当にランダム?	基礎工学部 長谷田 泰一郎 ---- 3
超高圧電子顕微鏡への超電導応用	工 学 部 奥 克 己 ---- 4
簡易温度制御装置の製作	理 学 部 本 河 光 博 ---- 6
談 話 室	
液化機とともに十年	低温センター 浅 井 攻 ---- 10
低温センター吹田分室から豊中地区への	
液体Heの定期的運搬について	基礎工学部 西 田 良 男 ---- 12
低温研究会へのお誘い	低温センター 山 本 純 也 ---- 13
低温センター利用案内	---- 14
共同利用実験室および装置	---- 15
寒剤供給状況	---- 17
液体ヘリウム及び水素利用研究室	---- 21
低温センターの構成	---- 23
表紙写真説明	
液化能力15ℓ/hのヘリウム液化機と容量250ℓの液体ヘリウム容器 (吹田分室設置)	

低温センターだより創刊号(1973 年 1 月号)裏表紙.